

# 多義語の心的実在性—小学5年生と大学生に対する調査から— Mental Reality of Polysemous Words: A Research Study into Primary Fifth-graders and University Students.

西内 沙恵  
Sae Nishiuchi

北海道教育大学  
Hokkaido University of Education  
nishiuchi.sae@a.hokkyodai.ac.jp

## 概要

本発表では多義語の心的実在性を検討するために、想起テストによって母語話者の言語直感を調査した結果を報告する。多義語のメカニズムを説明する基本原理に対して、その心的実在性を批判する立場に、用法説とアーティファクト説がある。小学5年生と大学生を対象に、「甘い」を題材に想起テストを実施した結果、想起される語義の偏りの変化と新規的な例文の産出という2つの説に沿わない結果が得られた。また語義のカテゴリー化関係から多義語の心的実在性を主張する。

キーワード：多義語、心的実在性、想起テスト

## 1. はじめに

本発表では多義語の心的実在性を検討するために、想起テストにより母語話者の言語直感を調査した結果を報告する。多義語は関連する二つ以上の意味が一つの言語形式と結びついたものである (Taylor, 2003)。例えば「甘い」という形式は(1)のように複数の語義を持つ。山括弧に下線部の語で表される意味を示す。

- (1) a. 夜あまいものを食べると虫歯になりますよ。  
(砂糖のような味がする様子)  
b. 関西のみそしるはあまくてどうも口にあわない。(塩分がたりない様子)  
c. あまい雰囲気<sup>(1)</sup>に酔う。(芳醇で快い様子)  
d. あの先生は採点があまい。(厳格さがたりない様子)  
e. 三番目のねじがあまくなっていた。(程度が低く、不十分である様子)

(飛田・浅田, 1991: 31-32. 下線は発表者による。)

## 2. 先行研究

多義語は「甘い」に限らず、多くの語に認められる現象である。多義語のメカニズムを、人間の基本的な認知能力に基づいて説明しようとする研究には蓄積がある (Lakoff & Johnson, 1980; Lakoff, 1987; Langacker, 1987; Tyler & Evans, 2001; Taylor, 2003; Fauconnier &

Turner, 2003)。多義語は関連しながらも不一致を含む語義がカテゴリー化関係によって結びついていると考えられており、言語知識の形成プロセスが明らかにされてきた。一方でその心的実在性に対する批判も根強い。大別して、語に意味を認めず人が具体的な用法をその都度解釈していると考える用法説 (Wittgenstein, 1968; Antal, 1963; 沢田, 1962) と、日常的な言語運用で話者が多義性を意識することがないため、多義性が研究者による創作に過ぎないと考えるアーティファクト説 (Victorri, 1997; Kleiber, 1999) がある。用法説では、例えば(2)において「吸う」の意味が微妙に異なるのは、具体的な文脈によると考える。多義語を認める立場では(2b)は(2a)の〈気圧差を利用して口中に入れる〉に見立てられ、実際に気圧差を利用しているわけではないが、あたかも人間が「吸う」ように〈繊維質の内部に取り込む〉と比喩的に使われていると説明される。

(2) a. 私が空気を吸う。

b. じゅうたんが埃を吸う。

(国広, 1982: 19. 下線は発表者による。)

アーティファクト説では語義の関係付けは現象の説明として不十分であり、意味を解釈するプロセスに動機付けがなされる。多義語は言語知識として存在しない、もしくは原理的な説明は必要ない現象なのだろうか。本発表では現代日本語形容詞を題材に、想起テストを調査し、多義語が心的に実在することを検討する。

多義語の研究には言語事実に基づく論証に加えて、心理実験的アプローチによる検証も行われている (中本ほか, 2004; 李ほか, 2007; 木下, 2018; 西内ほか, 2020)。ただし、先行研究は多義語の実態の調査が目的のため、調査協力者が言語運用を問題なく行える大人であった。大人から得られた調査の結果に対する認知能力を観点とした分析は理論による後付けと見なされ、心的実在性が疑われることがあった。

そこで、本研究では言語知識が完成されていない就学児童と言語知識が完成しているであろう大学生を対

象に調査を実施し、比較することとした。調査では指定の語を使った文を書き出す想起テストを実施し、想起される語義の分布と順序から語の運用状況を調べた。小学5年生と大学生に協力していただき、得られたデータを比較して示す。指定した語は「甘い」である。意味的に単純な語ほど多義的である (Johnson-Laird & Quinn, 1976) という特徴や、使用頻度の高い語は関連する複数の意味を有する (Langacker, 1987) という傾向から多義語は日常的に高頻度で使われる基本語彙に多いといえる。基本語彙の学習学年 (国立国語研究所, 2009) と単語親密度が高いことを基準に「甘い」を選んだ。「甘い」は中央教育基本語彙・阪本教育基本語彙・新阪本教育基本語彙・田中教育基本語彙によれば小学校低学年で学習される。天野・小林 (2008) の7段階評定 (1: なじみがない~7: なじみがある) の平均値である語義別単語親密度において、「甘い」は (3) の通りである。語義番号を括弧内に付記し、単語親密度が高い順に示す。

- (3) a. 砂糖や蜜の持っている味である。 (1) 6.075  
 b. 教育や採点などが厳しくない。親切で、何でも受け入れる。 (9) 5.125  
 c. 深く考えない。考えが足りない。のんきである。 (10) 4.975  
 d. 匂いが糖분을思わせるようだ。 (5) 4.175  
 e. 心が溶けるようだ。楽しい。 (6) 4.050  
 f. 料理で塩気が少ない。 (4) 3.675  
 g. ぴったり合わない。緩んでいる。 (3) 3.375  
 h. 大したものではない。 (11) 3.375  
 i. 男女間の愛情が細やかである。 (8) 3.425  
 j. 人を喜ばせて誘い込むようだ。 (7) 3.125  
 k. 刃物の切れ味が悪い。鈍い。 (2) 2.550

(見出し語 ID 番号: 00025610)

語義別単語親密度から、「甘い」は6以上の親密度で評定される語義を含むことから、就学児童も既習の語だと考えられる。また語義ごとに単語親密度が異なることから、未習の語義が含まれており、語義の知識を形成する過程が観察できる可能性がある。

### 3. 小学5年生に対する調査

#### 3.1 調査の手続き

2023年4月、北海道国立H小学校の小学5年生2クラス、計68名を対象に調査を実施させていただいた。調査の実施前に児童の保護者に対して調査研究への参

加同意の可否を文書で確認した。児童生徒自身の同意は授業中に確認している。本発表では保護者の同意が確認できた64名のデータに基づいて報告する。

想起テストは国語辞典について学習する授業の一環で、語彙を作る活動として実施した (図1)。授業は『小学校学習指導要領 (平成29年告示)』「国語」における〔小学校第5学年及び第6学年〕の内容〔知識及び技能〕(1)オ「思考に関わる語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにすること。また、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うこと。」に関わる習得状況に深まりと広がりを生む授業実践として行った。

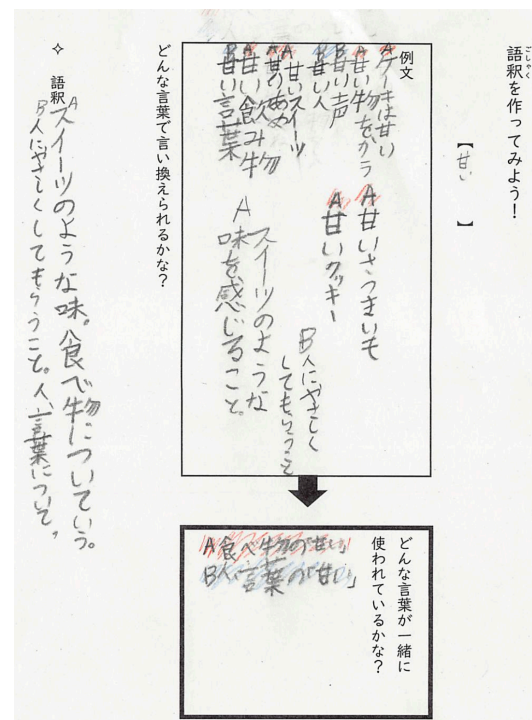


図1 語彙を作るワークシート

#### 3.2 調査の結果

10分間の時間制限のもと、「甘い」を使った例文を10文書き出すことを求める想起テストを行ったところ、計496回、平均して7.75回 (最高13回, 最低2回) 「甘い」の使用が産出された。1文に複数回「甘い」が使用された場合は、使用した延べ回数を数える。なお「甘すぎる」、「甘かった」等の活用した「甘い」は数えているが、「甘酸っぱい」等の複合語や「甘さ」等の別の品詞への転成は除いている。得られたデータに対して飛田・浅田 (1991) の5区分を参考に、〈砂糖のような味がする様子〉, 〈塩分がたりない様子〉, 〈芳醇で快い様子〉, 〈厳格さがたりない様子〉, 〈程度が低く、不十分である様子〉という語義をタグ付けた。

調査の結果、〈砂糖のような味がする様子〉の産出が必ず認められ、〈厳格さがたりない様子〉と〈程度が低く、不十分である様子〉の産出ができた児童も認められた。〈程度が低く、不十分である様子〉と〈芳醇で快い様子〉が次いで産出された。〈塩分がたりない様子〉は産出されていない。表1のように〈砂糖のような味がする様子〉、〈厳格さがたりない様子〉の順に早く想起された。

表1 小学5年生の意味別の想起順

意味 順番	砂糖のよう な味がする	厳格さが たりない	程度が 低い	芳醇で 快い
1	56	7	0	1
2	36	19	3	1
3	31	24	1	2
4	26	21	2	1
5	35	17	2	1
6	27	18	5	2
7	28	15	4	1
8	19	11	4	4
9	19	12	3	2
10	17	7	3	2
11	1	0	1	1
12	0	1	1	0
13	0	2	0	0
合計	295	154	29	18

図1のワークシートを用いて例文のグループ分けを行うタスクでは、〈厳格さがたりない様子〉を表す例文を産出した児童は〈砂糖のような味がする様子〉と〈厳格さがたりない様子〉をグループ分けした。〈芳醇で快い様子〉が産出された場合には〈厳格さがたりない様子〉に含めていた。

## 4. 大学生に対する調査

### 4.1 調査の手続き

2023年4月から6月にかけて、北海道国立H大学の1年生から4年生、計66名を対象に調査を実施させていただいた。調査の実施前に本人に対して調査研究への参加同意の可否を文書で確認している。参加が任意であることや、参加しないことで不利益を被ることがないことを文書と口頭で確認し、参加した後でも自由に同意の取り消しができることを伝えている。本発表では同意が確認できた66名のデータに基づいて報告する。

## 4.2 調査の結果

5分間の時間制限のもと「甘い」を使った例文を10文書き出すことを求める想起テストを行ったところ、計578回、平均して8.76回(最高10回、最低4回)「甘い」の使用が産出された。小学5年生の調査結果と同様の方法で意味情報のタグ付けを行った。調査の結果、表2のように、〈砂糖のような味がする様子〉と〈厳格さがたりない様子〉の産出が早く、多かった点は小学5年生の調査結果と同じであった。一方、〈芳醇で快い様子〉が〈程度が低く、不十分である様子〉より多く産出された点は、小学5年生と異なる結果となった。

表2 大学生の意味別の想起順

意味 順番	砂糖のよう な味がする	厳格さが たりない	程度が 低い	芳醇で 快い
1	48	6	8	4
2	20	23	16	7
3	19	19	9	14
4	20	16	12	15
5	22	17	10	15
6	23	15	9	13
7	22	19	9	9
8	22	22	2	7
9	22	7	4	6
10	24	12	4	6
11	1	0	0	0
合計	243	156	83	96

## 5. 分析

多義語の心的実在性を批判する立場として、用法説とアーティファクト説をあげた。本節では調査結果から両説に沿わない事実があることを示す。これにより心的実在性を否定する説では現象を正確に説明できず、多義語の心的実在性を前提に、多義語を分析する必要があることを主張する。

### 5.1 用法説に沿わない結果

小学5年生と大学生で共通して〈砂糖のような味がする様子〉が最も早く、多く産出されたことから多義語「甘い」の中心的な用法であることが示唆される。用法をその都度適切に解釈していると考えられる用法説では、〈砂糖のような味がする様子〉や〈厳格さがたりない様子〉と使用できる他の語義との産出にさがあることを説明できない。用法説では全ての用法を同等に受容していることになるため、想起の順番と量に偏りがあることも説明できない。

## 5.2 アーティファクト説に沿わない結果

アーティファクト説では多義語の語義間の関係付けやメカニズムが研究者の創造だとされる。想起テストを通して、(4) のような〈厳格さがたりない様子〉と〈程度が低く、不十分である様子〉の語義間の境界に位置付けられるような新規的な例文が産出された。

(4) a. わなのしかけがあまい

b. その技は甘い。

想起テストで多義語の複数の語義それぞれに典型的な例や、「詰めが甘い」「甘い蜜」等の慣用的な表現だけでなく、語義間の境界に位置付けられるような例が産出されたことから、協力者が創造的に多義語の知識を構築している様子が見てとれた。カテゴリー化が起きていなければ、新規的な例文は産出されないと考えられる。

## 5.3 カテゴリー化関係に基づく心的実在性

最後に認知意味論の立場を支持する結果を取り上げる。認知意味論では言語知識と現実世界に関する知識が区別できないという考え (Haiman, 1980) に基づき、メタファー、メトニミー、プロトタイプといった多義性のメカニズムとなる基本原理が解明されてきた (Lakoff & Johnson, 1980 ; Taylor, 2003)。

小学5年生を対象とした調査からは、既習語であっても、意味に応じて大人とは異なる運用傾向が見てとれた。小学生5年生と大学生で大きく異なっていたのは、〈芳醇で快い様子〉の使用頻度である。成長に伴い用法が定着したとも考えられるが、〈芳醇で快い様子〉を獲得したことで、〈砂糖のような味がする様子〉と〈芳醇で快い様子〉の間でスキーマからの精緻化によって語義のカテゴリー化関係が変化したと考えられる。

## 6. 考察

言語知識が完成されていない就学児童を調査対象とすることで、多義語の知識を形成する基盤にカテゴリー化関係の形成があることを分析した。また想起テストを通して新規的な例文と語義の偏りという点で、多義語の心的実在性を否定する用法説とアーティファクト説に沿わない調査結果が得られた。これにより多義語の言語知識が先行研究で示されてきたカテゴリー化関係に基づくものであり、心的に実在することを主張する。本発表は「甘い」に限定して調査を実施し報告したが、今後は多様な多義語を対象に調査を行うことで、多義語の心的実在性を実証できると考えられる。

## 謝辞

本研究で報告した調査の実施にあたり、渥美伸彦先生と斉藤誠先生に小学校での授業実践をアレンジしていただきました。ここに改めましてお礼を申し上げます。本研究は北海道教育大学学長戦略経費の助成を受けて行ったものです。

## 文献

- [1] 天野成昭・小林哲生 (編) (2008) 基本語データベース語義別単語親密度【1/あ〜さ】，学習研究社。
- [2] Antal, L. (1963) *Questions of Meaning*, Mouton.
- [3] Fauconnier, G. & Turner, M. (2003) "Polysemy and conceptual blending" In Nerlich, B., Todd, Z., Herman, V. & Clarke, D. D. (Eds.) *Polysemy: Flexible patterns of meaning in mind and language*, pp. 79-94. Mouton de Gruyter.
- [4] 林四郎 (1971) "語彙調査と基本語彙" 電子計算機による国語研究, Vol. 3, pp. 1-35.
- [5] Haiman, J. (1980) "Dictionaries and encyclopedias" *Lingua*, 50, pp. 329-357.
- [6] 飛田良文・浅田秀子 (1991) 現代形容詞用法辞典, 東京堂出版。
- [7] Johnson-Laird & Quinn (1976) "To define true meaning" *Nature*, Vol. 264, pp. 635-636.
- [8] 木下りか (2018) "多義動詞の意味拡張の起点と直観のプロトタイプ" 日本認知言語学会論文集, Vol. 19, pp. 519-524.
- [9] Kleiber, G. (1999) *Problèmes de sémantique: La polysémie en question. Septentrion*, Presses universitaires du Septentrion.
- [10] 国広哲弥 (1982) 意味論の方法, 大修館書店。
- [11] 国立国語研究所 (2009) 教育基本語彙の基本的研究—増補改訂版—, 明治書院。
- [12] Lakoff, G. & Johnson, M. (1980) *Metaphors we live by*, University of Chicago Press.
- [13] Lakoff, G. (1987) *Women, fire and dangerous things: What categories reveal about the mind*, University of Chicago Press.
- [14] Langacker, R.W. (1987) *Foundations of cognitive grammar: Vol.1, Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.
- [15] 李在鎬・鈴木幸平・永田由香 (2007) "動詞「流れる」の語形と意味の問題をめぐって" 計量国語学, Vol. 26, No. 2, pp. 64-74.
- [16] 中本敬子・野澤元・黒田航 (2004) "動詞「襲う」の多義性—カード分類と意味素性評定に基づく検討—" 日本認知心理学会第2回大会発表論文集, p. 38.
- [17] 西内沙恵・加藤祥・浅原正幸 (2020) "語義間類似度の双方向評定に基づくプロトタイプの意味の解明—クラウドソーシングを用いた量的調査による多義的形容詞分析—" 日本認知言語学会論文集, Vol. 20, pp. 256-268.
- [18] 沢田允茂 (1962) 現代論理学入門, 岩波新書。
- [19] Taylor, J. R. (2003) *Linguistic categorization: Prototypes in linguistic theory 3rd ed*, Oxford University Press.
- [20] Tyler, A. & Evans, V. (2001) "Reconsidering prepositional polysemy networks: the case of over" *Language*, Vol. 77, pp. 724-765.
- [21] Victorri, B. (1997) "La polysémie: un artefact de la linguistique?" *Revue de Sémantique et Pragmatique* Vol. 2, pp. 41-62.
- [22] Wittgenstein, L. (1968) *Philosophische Untersuchungen*, Blackwell.